

近代日本文学概説

東京大学教授
吉田精一 著

秀英出版

著者略歴

明治41年 東京に生まる。
昭和7年 東京大学文学部国文学科卒業。
現在 東京大学教授兼東京教育大学教授。
主 著 自然主義の研究（東京堂）
近代日本浪漫主義研究（修文館）
日本近代詩鑑賞（新潮社）
芥川龍之介（同）

近代日本文学概説

昭和34年11月15日 初版発行
昭和44年3月10日 11版発行

¥. 420

著作者 吉 田 精 一
発行者 株式会社秀英出版
印刷者 相川印刷株式会社

発行所 東京都新宿区
市ヶ谷左内町39

株式 秀英出版
会社

序 文

日本の近代文学史は、明治維新以後に始めるのが通説である。

これについても多少の異説がある。それは近代文学というより、近代という時代区分の問題である。すなわち近代の設定の上限を、あるいは十四、五世紀において、ヨーロッパの近代と平行させようとし、あるいは十六世紀半ばにおいて、ヨーロッパとの接触を区画時期としようとする。さらにまた、ヨーロッパの第何世紀という切り方にならって、十九世紀の開始をもって近代を始めようとするに近い説もある。

これらについていちいち論じるとまはないが、ここには簡単に結論だけを提示したい。

今日ヨーロッパの近代史（政治史・社会史等）をいう場合、Seignobos の名著「近代ヨーロッパ政治史」以来、フランス革命以降をもって近代史をたてるのが普通である。すなわち市民社会の成立以後が近代なのである。よしルネサンス以後を近代（近世）と称して中世と大別しても、近代をさらに二分して、われわれの現在に標準をおき、われわれの時代と共通の社会組織・文化を把有する時期をもって、それ以前と区別することはじゅうぶんなる理由が存するのである。

日本の近世、すなわち江戸時代は、封建制度下の社会であり、文化もまた然りであった。封建制度の克服をもって、近代社会・近代国家が始まるとすれば、日本においては、当然明治維新以後にこれを求めざるをえない。すなわち日本が市民社会と結びつけられたのは明治維新以後である。フランス革命によって市民社会が成立した事情と等置できるものは、この時期に起点をおく以外にはないのである。

されば日本の近代（市民社会）は一八六八年に始まり、今日に至る期間であつて、わずかに九十年をこえるにすぎない。しかしながら、内実はフランス革命（一七八九年）以降、百七十年をこえる時代に匹敵するのである。また思想・文化の内容にみればフランス革命に先だつ十八世紀の啓蒙時代は、明治維新以後に包含されるのであるから、さらに少なくとも数十年はさかのぼらせねばならぬ。すなわち明治以降九十年の歴史は、二百数十年にわたるヨーロッパ史をふくむことになるのである。

ということは、明治以後の社会も文化も、かけ足で近代社会の建設に向かったことを意味する。文化の発展は内面的な自然の発展以上に、海外の異種の文化圏に触発されての、いわゆる「外発的」なものであつた。ここに日本の近代文化の、混乱と、雑駁と、未熟との大きな原因が存している。

ところで、アルベール・チボーデのフランス文学史（一七八九年より現代まで）では、フランス革命以後は三十年を一ジェネレーションとして時代を画り、さらに、それを二分している。チボーデによると、一七八九年以来のあらゆる文学上の世代は、平均して十五年後には、一つの曲り角^{まがど}、一つの危機に遭遇する。そしてその曲り角や危機は、それらの世代を、多少とも二つの半世代に分割するのである。

しかし、このままの区割を、われわれの文学史にあてはめることはむづかしい。対象と方法とは相互に限定しあうもので、対象の内容把握に先だつて、方法を先取することは、文学史のように複雑多岐で、社会とも重要な関係のある分野については危険が多い。

維新以後今日に至る文学の歴史をみると、ほぼ二十年をもつて一ジェネレーションとみ、さらに十年ごとに曲り角にくると考えたほうが、より適切な裁断法である。

すなわち明治元年前後の、維新革命を第一期、小説神髓や、硯友社の結成した時期を第二期、日露戦争直後

の自然主義文学の運動を第三期、大正十四、五年のプロ文学や新感覚派による新運動を第四期、昭和二十年の終戦による転換を、さらに次の第五期とする。

その間に明治十一、二年ごろからの翻譯・政治小説の出現による小区画をはじめ、明治二十七、八年の日清戦争直後の新機運、大正三年の第一次世界大戦による小区画、昭和九年前後のプロ文学の壊滅による一新時期など、ほぼ十年ごとの曲り角を数えることができる。それはまた日本の資本主義社会の発展、一般文化および思想の進展と、ほぼ歩みを等しくするのである。

本書はだいたい以上のような時代区分を根底として、明治・大正・昭和の近代文学を鳥瞰したものである。今日、終戦までの文学の歩みは、ほぼ客観的な観照が可能な時期に達したが、戦後のそれはまだ正確に批判するにたえない。本書が戦後を簡単に叙したのは、そのような理由からである。

さて、本書の目的は、手ごろな日本近代文学の通史的概観を試み、一般の人々に近代文学の一通りの常識を備えるたよりにするとともに、新制大学の教科書・参考書ともなり、また中学高校国語科教官の参考資料として役だつことを期待したものである。

付載した年表は、久松潜一博士と私の共編した「近代日本文学辞典」につけたものを、さらに削正したもので、いくぶんとも原典より誤りは少なくなっているはずである。

なお、この仕事のために山田晃君、校正に平岡敏夫君をわずらわした。ここに記して謝意を表す。

昭和三十四年十月

目次

第一期(明治元年——十九年).....	一
第一章 概 説.....	一
第二章 文芸思潮・評論.....	二
一、啓蒙思想.....	二
二、福沢諭吉.....	三
三、その他の啓蒙家.....	四
四、写実主義文学論.....	六
第三章 啓蒙期の文芸.....	八
一、戯作文学.....	八
二、翻訳文学.....	一
三、政治小説.....	三
四、新体詩抄.....	一六

第二期(明治二十年——三十八年)……………一八

第一章 概 説……………一八

第二章 文芸思潮・評論……………一九

一、評論雜誌と時代思想……………一九

二、文芸評論の抬頭……………二一

三、「文学界」と北村透谷……………二三

四、浪漫主義思潮と高山樗牛……………二四

五、自然主義評論の芽ばと……………二六

第三章 小 説……………二九

一、言文一致と二葉亭四迷の「浮雲」……………二九

二、森鷗外の創作活動……………三二

三、写实派の小説……………三五

四、写实主義の進展と浪漫的傾向……………四〇

五、自然主義の萌芽……………四二

第四章 戯 曲……………五三

一、新史劇の勃興……………五三

二、演劇界の前進……………五四

第五章 詩 歌……………五五

I 詩……………五五

一、新体詩創造への努力……………五五

二、浪漫的詩歌の全盛……………五六

II 短 歌……………五六

一、短歌の革新……………六六

二、「明星」と与謝野晶子……………六六

三、根岸短歌会……………六八

III 俳 句……………七〇

一、俳句の革新と正岡子規……………七〇

二、子規没後の俳壇……………七一

第三 期（明治三十九年——大正十四年）……………七三

第一章 概 説……………七三

第二章 文芸思潮・評論	七五
-------------	----

一、自然主義	七五
--------	----

二、耽美思想	七九
--------	----

三、森鷗外・夏目漱石の動向	八一
---------------	----

四、理想主義の思潮	八二
-----------	----

五、理想主義の思潮	八四
-----------	----

六、階級的文学論の抬頭	八六
-------------	----

第三章 小説	八六
--------	----

一、自然主義の小説	八六
-----------	----

二、森鷗外および夏目漱石と写生文派	九六
-------------------	----

三、耽美派の小説	一〇三
----------	-----

四、白樺派	一〇八
-------	-----

五、理想主義の作家たち	一二八
-------------	-----

六、私小説・心境小説	一三五
------------	-----

第四章 戯曲	一二七
--------	-----

一、文芸協会と自由劇場	117
二、小説家の戯曲	119
第五章 詩 歌	120

I 詩	120
一、口語自由詩	120
二、耽美派の詩	121
三、理想主義の詩	123
四、官能的象徵詩	124
II 短 歌	125
一、自然主義の影響	125
二、大正期の歌壇	126
III 俳 句	126
一、新傾向の俳句	126
二、伝統俳句の流れ	127

第四期（大正十五年——昭和二十年）	128
-------------------	-----

第一章 概 説	129
---------	-----

第二章 評 論……………一五〇

一、プロレタリア文学の評論……………一五〇

二、新感覚派の文学評論……………一五三

三、新興芸術派の評論その他……………一五五

四、小林秀雄の評論その他……………一五六

五、日本浪漫派の評論……………一五八

第三章 小 説……………一六〇

一、プロレタリア小説……………一六〇

二、新感覚派……………一六三

三、新興芸術派その他……………一六六

四、既成作家の諸相……………一七一

五、昭和文学の転換……………一七三

六、戦時下の文学……………一七六

第四章 戯 曲……………一七八

一、プロレタリア戯曲……………一七八

二、岸田国士と「劇作」派	一八〇
--------------	-----

第五章 詩・短歌・俳句	一八三
-------------	-----

I 詩	一八三
-----	-----

一、詩と詩論	一八三
--------	-----

二、プロレタリア詩	一八四
-----------	-----

三、四季派	一八四
-------	-----

II 短歌	一八七
-------	-----

III 俳句	一八九
--------	-----

第五期（昭和二十年——）	一九一
--------------	-----

第一章 概説	一九一
--------	-----

第二章 評論	一九二
--------	-----

一、戦後派文学の評論	一九二
------------	-----

二、民主主義文学系の評論	一九三
--------------	-----

三、既成評論家の活動	一九四
------------	-----

第三章 小 説	一九五
---------	-----

一、伝統文学の動向	一九五
-----------	-----

二、民主主義文学系の小説	一九六
--------------	-----

三、戦後派文学	一九六
---------	-----

第四章 演劇・詩歌	一九八
-----------	-----

一、演 劇	一九八
-------	-----

二、詩	一九九
-----	-----

三、短歌・俳句	二〇〇
---------	-----

研究 文 献	二〇一
--------	-----

近代日本文学年表	二二五
----------	-----

索 引	二五九
-----	-----

第一期（明治元年——十九年）

第一章 概 説

明治改元以後の十年は、こと文芸に限っていえば、むしろ江戸文学の亜流時代であるが、これを時代思潮の上からいえば、江戸時代とは相当顕著なひらきがあり、十年以後の文芸思潮をつちかったものであるから、明治初期の思想を概括して、啓蒙思想と称しておくのである。

約二十年間の文芸思潮のうち、十年以後をさらに細分すれば、明治十一年以後の翻訳文学全盛期と、十五年以後の政治文学の隆昌期との二期に分けることができる。

明治の初期は、物質的、精神的に啓蒙思想の行きわたった時代であり、ことにその初期は文明開化熱が旺盛で、事物の革新改造にいそがしく、悟性的な文化以外にはかえりみられず、文学芸術などは徳川戯作文学の残滓として存在するにすぎなかった。十一年以後は、やや新時代的文芸活動がみえ始めたが、それらも啓蒙的、功利的な性質を帯びていて、純文学的価値を要求するよりも、材料の興味による、啓蒙的なものが多い。翻訳小説から政治小説に進むに従い、文学もまたようやく男子の事業ともなりうることを示し、その価値と本質に対する認識を深めてきた。そうして啓蒙時代文学を通じる精神は、封建的遺制・偏見からの人間性の解放と、悟性的な合理主義である。その結果生じた個人の自覚と、個人主義思想が、啓蒙思潮の残した贈物であった。

この個人主義思想の成長とその行きづまりが、明治大正文芸思想の底流をなすものであったが、啓蒙思想は実にその淵源をなしたのである。

第二章 文芸思潮・評論

一、啓蒙思想

あらゆる偏見を理性の力によって除こうとする啓蒙思想が、精神・生活上の指導的な位置を占め、ある時代の特徴を形成したのは、十七世紀末から十八世紀末にかけてのいわゆる啓蒙時代である。この思想はこの期間に、全ヨーロッパに氾濫したのであるが、国によって多少の相違はあったにしても、精神の解放、個人の自由確立と、悟性による主知主義・合理論はすべての啓蒙思想に通じるところであった。

日本における近代もまた個人の自覚によって始まる。人間の自由解放の運動として、江戸時代の封建制度と封建権力から脱し、近代的な資本主義体制へ道をひらいた明治維新の变革の精神は、とりも直さず啓蒙精神だった。藩閥政府としての明治政府も、国家資本主義からのたち遅れを解消していく必要から、産業の資本主義的發展を希望しており、その土台となった当時のブルジョアジーの意識はこの意味で進歩的なものであった。一般に啓蒙思潮は、ブルジョアジーがその発展過程の必然性を阻止しようとする封建体制と思想との不合理に對して、さし向ける思想と批評だという。いわばそういう自由主義運動であり、知識的、政治的解放を要求する思想なのである。そうしてこの啓蒙思潮を一身に具現し、あらゆるものに新しき合理主義を発見しようとし

たのが福沢諭吉（天保五年—明治三十四年）
（一八三四—一九〇一）だった。

二、 福 沢 諭 吉

福沢の、あるいはこの時代初期の啓蒙思想は、何よりも未開を脱して文明につくことであった。ギョーおよびバツクルの文明史が洋書中最高尚として喜び読まれ、福沢自身もこれらによって「文明論之概略」（明治八）を書いている。この啓蒙思想の特色をいえば、第一に主知主義、第二に自由主義、第三に実用主義・功利主義であった。

「吾々の本願は唯旧を棄てて新に就かんとする一事のみ」（『福沢全集』緒言）とかれはいい、きたるべき社会の要求にこたえて、百般のことについて著述を行なった。一身で、西洋の事情、全国各地の地理と歴史と文物の制度を教え（『西洋事情』、『世界国尽』）、物理化学を教え（『窮理図解』）、簿記法を教え（『帳合之法』）、演説法を教え（『会議弁』）、さらに小銃射撃の方法から攻城野戦の法まで教えた（『雷銃操法』、『洋兵明鑑』）。西洋の合理文明・物質文明は、日本独立の文明を保持するために、あるいは「国体を保つ」ために、必要だからであった。

個人智力の増進とともに、その自由独立は、また日本が独立国たるために必要な条件である。個人の価値を認めぬ封建思想・封建道徳は福沢のきびしく否定するところだった。「女大学評論」（明治三一）「新女大学」（同年）によれば、かれの最も進んだ女性観がうかがわれるのである。かれは大胆に旧物・旧制度・金をいやしみ商売を蔑視する、士族の封建的道德感情等を嘲笑した。役にもたぬ討死をした楠公の湊川の戦死を、権助が主人の金を落として首くくりをしたのと同じと喝破した、いわゆる「楠公権助首くくり論」は、新しい功利主義的立場からの旧道徳へのはげしい挑戦だった。